

研究課題名：学校健康教育におけるがんについての教育プログラムの開発研究

課題番号：H24-がん臨床-一般-010

研究代表者：聖心女子大学文学部教育学科 教授 植田 誠治

## 1. 本年度の研究成果

### (1) 児童生徒のがんについての意識と知識の全国実態調査の分析

本調査は、都道府県の児童生徒数を考慮して実施された本邦初の実態調査である。

調査対象学年は、小学5年生、中学2年生、高校2年生であり、回収率は、小学校で44.1% (94校)、中学校で46.4%(103校)、高等学校で55.8%(116校)であった。回収された調査用紙における有効回答数は、小学生で2260部、中学生で3058部、高校生で3821部であり、これらを分析の対象とした。

#### 1) 児童生徒のがんに関する意識の調査結果

「がんについての印象」は、小学生で、こわいと思わない4.5%、どちらかといえばこわいと思わない2.1%、どちらかといえばこわいと思う16.2%、こわいと思う71.9%、わからない5.1%、無回答0.2%であった。中学生で順に、8.3%、3.4%、16.9%、65.9%、5.3%、0.3%であった。高校生では順に、9.1%、3.6%、13.7%、68.9%、4.0%、0.6%であった。

「がんは治療で治ると思うか」については、小学生で、治ると思う25.8%、どちらとも言えない47.8%、治らないと思う13.0%、わからない13.1%、無回答0.4%であった。中学生で順に、24.0%、55.5%、12.0%、8.3%、0.2%であった。高校生では順に、22.8%、60.0%、11.6%、4.9%、0.7%であった。

「自分ががんになると思うか」については、小学生で、思う8.5%、どちらとも言えない28.6%、思わない19.8%、わからない42.5%、無回答0.7%であった。中学生で順に、13.3%、36.5%、13.0%、36.9%、0.3%であった。高校生では順に、19.7%、40.9%、8.9%、29.8%、0.6%であった。

「がんは予防できると思うか」については、小学生は、予防できると思う57.4%、どちらとも言えない17.1%、予防できないと思う12.3%、わからない12.8%、無回答0.4%であった。中学生は順に、47.9%、24.1%、14.7%、13.0%、0.2%であった。高校生では順に、43.0%、30.2%、14.6%、11.5%、0.7%であった。

「がんの検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思うか」については、小学生は、受けようと思う77.8%、どちらとも言えない16.7%、受けようと思わない4.8%、無回答0.7%であった。中学生は順に、68.1%、24.6%、7.0%、0.3%であった。高校生では順に、67.2%、24.2%、7.9%、0.7%であった。

以上のように、「がんについての印象」で、どちらかというところわいと思うところわいと思うと回答した割合をあわせると、小学生、中学生、高校生とも8割を超えた。このうち、こわいと思うは7割程度を占めていた。この結果は、わが国の児童生徒向けのがんについての教育の在り方を検討する上で貴重なデータと言えよう。

がんは治らない病気であると思っていたのは、小学生の13.0%がもっとも高く、高校生の11.6%がもっとも低い割合であった。がんをこわいと思っているが、不治の病という認識ではないことがうかがえる。治療で治ると思うかという問いに対しては、どちらとも言えないが5割から

6割を占めており、早期発見や良性の場合ならば完治が見込めるという一般的な見方をすることができている児童生徒も多いと言える。

「受けられる年齢になったらがん検診を受けようと思うか」という問いに、小学生では7割を超えたものの、中高生では7割を割り込むものであり、このような意識をより高めていく工夫が必要と考えられる。

## 2) 児童生徒のがんについての知識

「がんの検診はどこで受けられると思うか」について複数回答で選択された割合は、小学生は、病院や医院96.4%、職場11.3%、地域の保健センターや保健所41.0%、その他1.9%であった。中学生は順に、96.7%、16.5%、27.4%、1.2%であった。高校生は順に、95.3%、16.6%、36.0%、0.7%であった。

「がんの検診はどのような人が受けるものだと思うか」について複数回答で選択された割合は、小学生は、健康な人37.7%、自覚症状のある人77.4%、医者から受けるようにすすめられた人74.1%、その他8.3%であった。中学生は順に、60.7%、75.2%、69.8%、9.8%であった。高校生は順に、68.2%、75.8%、65.2%、8.7%であった。

「がんはどのような原因でなると思うか」について複数回答で選択された割合は、小学生は、たばこ95.5%、お酒・アルコール81.6%、細菌・ウイルス59.0%、ストレス57.9%、運動不足32.4%、太りすぎ42.7%、野菜を食べない37.3%、脂肪（油）の取りすぎ54.4%、食品添加物28.0%、魚や肉の焼けこげ37.6%、塩分の取りすぎ47.5%、遺伝37.4%、環境ホルモン35.5%、直射日光の当たりすぎ30.0%、その他2.9%であった。中学生は順に、94.4%、79.4%、42.9%、52.9%、26.1%、33.5%、29.0%、44.3%、24.2%、40.1%、37.1%、57.4%、28.7%、37.7%、2.9%であった。高校生では順に、93.9%、76.6%、30.4%、50.8%、30.8%、27.3%、24.9%、38.5%、24.8%、40.8%、32.9%、68.9%、27.8%、41.5%、1.9%であった。

以上のように、がん検診について、病院や医院で受けられると回答した割合は95%を超えていた。しかし、地域の保健センターと回答した割合は半数にも満たなかった。また、がんの検診はどのような人が受けるものだと思うかという問いに、健康な人を選択した中高生が6割程度いる一方で、小学生は37%であった。

がんの原因でたばこを選択した割合は、どの学校種でも最も高く9割を超えていた。続いて酒・アルコールが続き8割前後の選択があった。3番目に高い回答割合は、小学生では細菌・ウイルスが6割程度であったのに対し、中学生と高校生では3割程度であり、遺伝は、中学生と高校生でそれぞれ57.4%、68.9%であった。

## 3) がんについての情報源

「がんのことを何で見知ったか」については、小学生は、テレビ96.2%、雑誌14.2%、マンガ本12.8%、インターネット27.6%、新聞43.7%、家族の話47.2%、学校での保健の学習20.3%、学校での保健以外の学習7.3%、病院のポスターやチラシ53.7%、家族や親せきでがんにかかった人23.6%、家族や親せき以外の知り合いでがんにかかった人13.5%、その他2.8%であった。中学生は順に、96.5%、14.1%、14.7%、29.0%、32.9%、33.8%、40.1%、6.3%、47.0%、27.2%、15.8%、2.1%であった。高校生は順に、94.8%、14.0%、12.7%、32.0%、28.3%、31.9%、62.9%、

9.3%, 38.3%, 31.0%, 20.6%, 1.5%であった。

以上のように、がんについての情報源は、テレビを選択した割合がもっとも高く、小学生、中学生、高校生ともに9割を超えていた。成人を対象とした内閣府の調査においても、テレビを選択した割合が73.6%ともっとも高くなっていた。本研究で示した児童生徒の実態とあわせ、わが国では幅広い年齢層ががんについての情報をテレビから得ていること示された。また、学校での保健学習は、学年があがるとともに上昇するが、高校生で6割であった。

#### 4) 子宮頸がんの予防ワクチンについて

中学生、高校生に、「子宮頸がんの予防のためのワクチンがあることを知っているか」を聞いたところ、中学生で、知っていると回答したのは66.8%, 知らないが31.3%, 無回答が1.9%であった。高校生では順に、77.6%, 20.9%, 1.4%であった。

中学生、高校生に、がんの治療方法で知っているものを複数選択するように求めたところ、中学生で、手術は88.3%, 抗がん剤が89.7%, 放射線治療は71.3%であり、高校生は、手術は88.3%, 抗がん剤が89.7%, 放射線治療は71.3%であった。

## 2. 前年度までの研究成果

### (1) 日本の学校健康教育における内容構成の検討とがんについての教育の位置づけ

#### 1) 保健学習における位置づけ

がん発症の要因、がんの予防、がん予防のための検診などの内容については、現在の保健学習においても、小学校、中学校、高等学校の系統性を配慮しながら位置づけていくことが可能であるが、がんが生活行動との関係を中心にして取り扱われていることやがんをまとめた内容として扱えないなどの限界が認められた。

#### 2) 保健学習以外の位置づけ

道徳においても、がんについての教育を取り上げることが可能である。暖かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつこと、また、生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重することなどである。その他に、特別活動の時間、生活科、総合的学習の時間の位置づけも示唆された。

### (2) 諸外国の学校健康教育プログラムの分析とがんについての教育の位置づけの検討

諸外国では、喫煙とがんの関係、紫外線と皮膚がんの関係が内容として扱われることが多い。また米国がん協会がスポンサーとなった「ナショナル・ヘルスエデュケーション・スタンダード」英国で、教育雇用省と保健省が作成した「ヘルシースクール・プログラム」などでは、児童生徒に健康リテラシーを高めることを中心の目的としている。

## 3. 研究成果の意義及び今後の発展性

本年度は、児童生徒のがんについての意識や知識の実態の詳細な分析、昨年度から進めている日本と諸外国の学校健康教育の動向を踏まえたうえで、学校健康教育におけるがんについての教育のあり方について総合的に検討することが可能となった。教師向け指導書と児童生徒用教材についての具体的な教育プログラムの開発を進めており、・がんに関する指導の意義と重要性、・がんに関する指導の目標と内容、・発達段階に応じたがんに関する指導の内容・がんに関する指導の機会と進め方・がんに関する指導計画例・がんに関する指導の展開例（小学校、中学校、高等学校）を提示し、学校教育の中に、がんについての教育を位置づけていく際の指針

づくり，児童生徒を対象としたがんについての教育の推進に寄与する。

#### 4. 倫理面への配慮

本研究はヘルシンキ宣言，疫学研究に関する倫理指針，日本学校保健学会倫理綱領を遵守して計画され，研究分担者の所属する大学倫理委員会の審査を経て承認を得た。調査用紙は完全無記名であるがデータ入力とその保管は研究実施者の管理の下に適切に行われた。

#### 5. 発表論文

(学会発表)

1. 植田誠治，衛藤隆，渡邊正樹ら，児童生徒のがんについての意識・知識の実態（1）  
－がんについての意識－，学校保健研究， 55 (Suppl.) 163, 2013
2. 杉崎弘周，植田誠治，衛藤隆ら，児童生徒のがんについての意識・知識の実態（2）  
－がんについての知識－，学校保健研究， 55 (Suppl.) 163, 2013
3. 物部博文，植田誠治，衛藤隆ら，児童生徒のがんについての意識・知識の実態（3）  
－がんの原因の認識と情報源－，学校保健研究， 55 (Suppl.) 164, 2013

(論文)

1. 植田誠治，杉崎弘周，物部博文ら，児童生徒のがんについての意識の実態，学校保健研究（投稿中）
2. 物部博文，植田誠治，杉崎弘周ら，日本における児童生徒のがんの原因についての認識と情報源，学校保健研究（投稿中）
3. Sugisaki K, Ueda S, Monobe H, et al, Japanese students' knowledge about the name of cancer based on nationwide survey, BMJ Open (投稿中)
4. Sugisaki K, Ueda S, Monobe H et al, Recognition of Cancer among Japanese Students in Elementary, Junior High, and High Schools, PLoS ONE (投稿中)

#### 6. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③所属機関及び現在の専門 (研究実施場所)	④所属機関における職名
植田誠治	研究全体の総括ならびに成果の提言	聖心女子大学文学部，健康教育学・学校保健学，(教育学研究室)	教授
衛藤 隆	研究全体への専門的（医学的）助言	母子愛育会日本子ども家庭総合研究所，母子保健・学校保健学・小児科学	所長
渡邊正樹	プログラムの分析と教師向け指導書の作成	東京学芸大学教育学部，学校保健学・健康教育学・安全教育学	教授
物部博文	プログラムの分析と中学・高校生用教材の作成	横浜国立大学教育人間科学部，健康教育学・学校保健学	准教授
助友裕子	プログラムの分析とプログラム開発のための資料データの提供	国立がん研究センター，健康社会学・がん教育学・ヘルスプロモーション	研究員
杉崎弘周	プログラムの分析と小学生用教材・教師向け指導書の作成，統計的研究	新潟医療福祉大学健康科学部，学校保健学・保健体育科教育学	講師